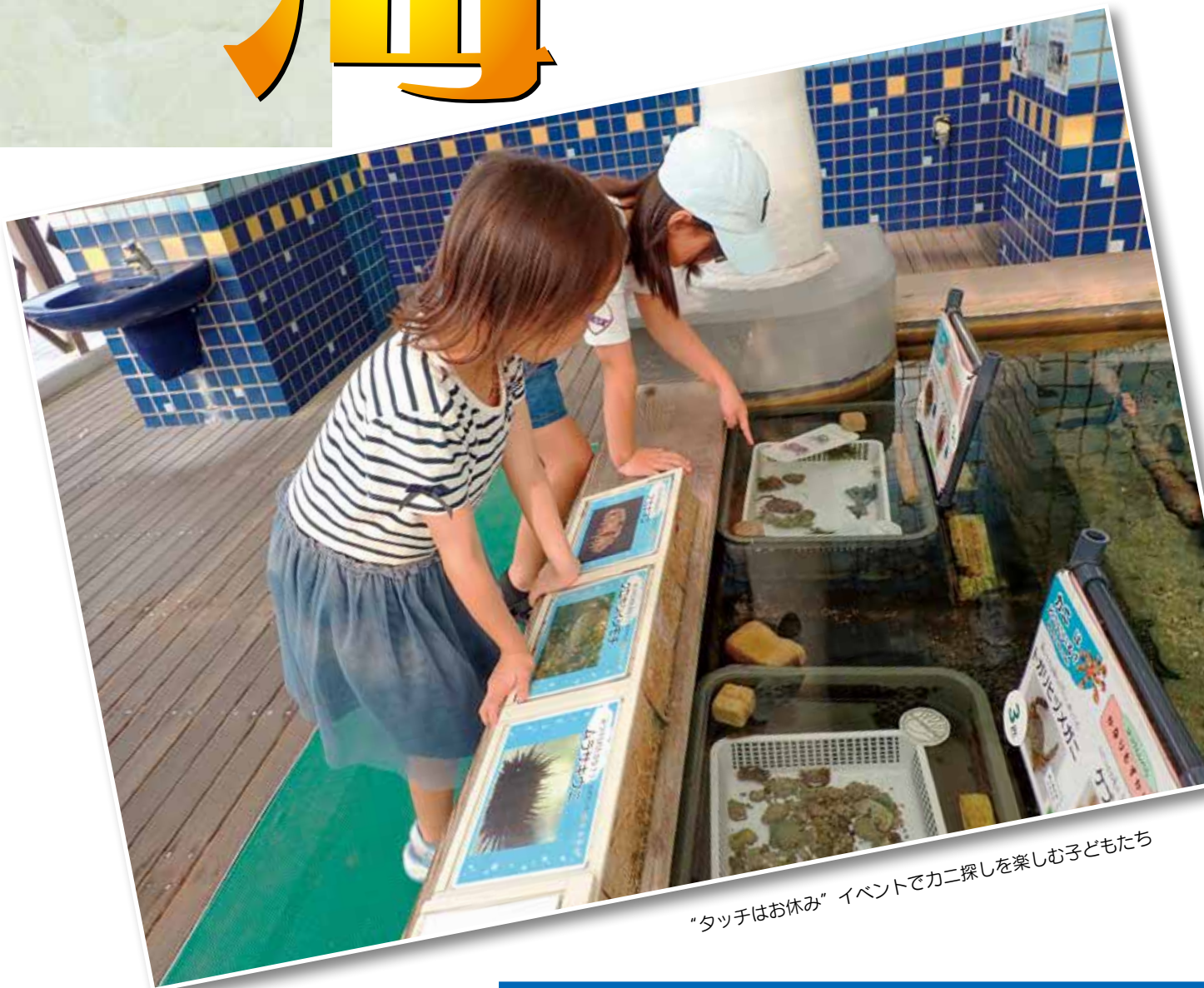


すくらじまの 海

2025年 第29巻 第2号

111



“タッチはお休み” イベントでカニ探しを楽しむ子どもたち

水族館の仕事	がくしゅうこうりゅうがかり ～学習交流係～ 後編	2.3
いるかの時間・あざらしの時間	「赤ちゃんイルカの成長」	4
ここがみどころ	「2階 サンゴ礁水槽（メガネモチノウオ）」	5
錦江湾のなかまたち	「107. ミルのなかま」	5
アクアラボ	「これはカニ？カニじゃない？目指せ！見分けマスター」	6
特別企画展	「海の宝を釣り上げろ！鹿児島島の釣魚展」	6
かごしま水族館の調査によって報告された魚たち		7
いおワールド通信		8
鹿児島 未知の魚を発見！	「No. 40 ダイオウカサゴ」	8

前号では学習交流係の仕事の教育普及活動について紹介しました。学習交流係はお客さまとのやりとりや他部署との調整など人と関わることが多い部署ですが、飼育・展示にも携わります。今号では、学習交流係が関わる飼育や展示について紹介します。

ワクワクはっけんひろばの管理

かごしま水族館 1 階の「ワクワクはっけんひろば」は、「水辺・発見・体験」をキーワードに体験しながら学ぶことができる場所です。磯や小川を再現した水槽では石を持ち上げて隠れている生きものを探したり、植物の陰に隠れる魚を観察したりと、まるで自然の中で生きものに会えるような体験ができます。小さな子どもの目線に合わせた水槽や、定期的に変わるカウンターの展示、職員手作りの解説パネルがこのコーナーの特徴で、名の通り「発見」を楽しむ仕掛けや工夫を取り入れています。



桜島の裾腰海岸を再現した磯の水槽



里の小川を再現した水槽



石を持ち上げて生きもの探し

学習交流係はひろば全体の管理を担当しています。生きものの飼育全般や掃除のほか、展示生物の採集にも出かけます。県内の河川や海岸に出かけて生きものを採集し、生息環境や風景などを参考に水槽を整えたり、解説パネルを作ったりして身近な自然や水生生物のことを伝えています。

また、何度来ても新しい発見があるように、ひろばにあるカウンターの展示は数ヶ月に一度更新しています。ここでは魚のうろこやサメやエイの歯など、普段は展示していない標本や模型を手にとって間近で観察することができますが、この展示内容も自分たちで考え、標本を集めたり、解説パネルを作ったりします。

ひろばには、飼育員とは別に解説員と呼ばれるスタッフが常駐し、解説や見回りを行っています。日々お客さまと接する解説員の方々からは、展示をご覧になったお客さまの反応や生の声、生きものの様子など多くの情報をいただきます。私たちは解説員と協力しながら展示内容を改善したり、お客さまの質問に答えたりと、より楽しく学ぶことができる場所になるよう努めています。



発見カウンターの展示は定期的に変更します



実物に触れる体験で新しい発見を

タッチプールの管理

タッチプールは館内で唯一生きものを触ることができる人気のコーナーです。ヒトデやナマコ、ウニなどに触れる経験を通して、体のつくりや動きを知り、より身近に感じてもらうことを目的として展示を行っています。私たちはタッチプールの生きものの飼育全般や掃除、解説の作成、展示生物の採集も担当します。水族館の建物の外に位置するため、水温の季節変化や天候、桜島の噴火による降灰の影響などに気を配りながら管理しています。



タッチプール

動物福祉とこれからのタッチプールの運営

生きものに触れる経験は楽しく、強く印象に残ります。普段は触れる機会のない海の生きものであればなおさらで、触ることで興味を持ち、学びにつながる可能性もあります。しかし本来は人に触られるはずのない生きものたちは、触られることで傷ついたり、乱暴な扱いを受けたりして死んでしまうこともあります。命の大切さを伝えるはずの水族館で、人の手によって生きものが消耗してしまう状況は、動物福祉や限りある水産資源の保全の観点からも長らく大きな課題でした。そこで、この状況を改善するためにここ数年は

タッチプールの運営方法を見直し、いくつかの試みを行っています。例えば、触られる負担が特定の個体に集中しないよう、触れる生きものを入れ替え制にした“タッチOKかご”を導入しました。また、体のつくりや行動などの観察ポイントを解説パネルに追加することで、動きが少ない動物も“生きている命”であることを意識づけたり、外国のお客さまにも伝わるように複数の言語やイラストで注意事項を表記したりしました。さらに2022年からは、GWや夏休みなどの多客時は生きものを触らずに観察やクイズを楽しむ“タッチはお休み”イベントの開催も行っています。(本誌101号参照) これらの取り組みには一定の成果が見られ、以前と比べて生きものの死亡数を大きく減少させることができました。



「タッチはお休みイベント」ポスター



繁忙期は生きものを探したり観察したりする展示に変更

動物福祉に配慮したタッチプールの運営はまだ課題が多く残されています。生きものの命も、お客さまの学びや楽しみも、どちらも大切にしながら両立できる方法を模索中です。海や社会を取り巻く環境は日々変化し、正しいとされることも変わっていきます。時代の変化に合わせた飼育や展示で生きもののことを伝えていくことができるよう、試行錯誤を続けていきたいと思っています。(二階堂 梨沙)

いるかの時間
あそびの時間

赤ちゃんイルカの成長^{せいちよう}

ハンドウイルカ、マールの赤ちゃんが誕生してから、早いもので6か月が経ちました。前号ではマールの妊娠が確認されてから出産までを紹介しました。そして、愛称が「ユキ」に決まったマールの赤ちゃんには、いろいろな変化と成長がありました。

ユキの成長には驚かされることばかりです。最初に驚いた出来事は、母乳を飲み始めるのがとても早かったことです。これまで当館で生まれたイルカの赤ちゃんは、15時間から24時間くらいで初めての哺乳が確認されることが多かったのですが、ユキは生後2時間30分で確認されました。これはマールが上手に授乳をしてくれたおかげでもあります。



そして生後2か月ごろ、私にとって忘れられない出来事がありました。いつものように、朝にマールの健康チェックをしていた時のことです。ユキがマールよりも私の近くにやってきました。私はとっさに手を伸ばして、ユキの背びれのあたりをなでました。それが、飼育員がユキに初めて触ることができた瞬間でした。あまりにも突然のことで「初めてなのにこんなに触れるの?!」と驚いたことを覚えています。それからユキは飼育員の前に来ては体を触ってほしそうにすることが増え、今では全身どこでも触らせてくれるようになりました。近くに寄ってきたり体を触らせてくれたりすることで、新たな傷ができていないかなど、体の状態を詳しく見るができます。また、ユキは他のイルカたちのまねをしてジャンプをするようにもなりました。他のイルカたちと比べるとま

だまだ小さなジャンプですが、お客さまからは歓声^{かんせい}が上がることもあり、イベント中はどのイルカよりも注目を集めているようです。



さて、次の目標はユキにえさの魚を食べてもらうことです。ハンドウイルカは4歳から5歳くらいまで母乳を飲み続けることが多いのですが、生後数か月ごろからえさの魚にも興味を示し、少しずつ食べ始めます。今まではマールの母乳だけで栄養を摂っていましたが、これからはえさの魚からも栄養を摂ってもらう必要^{ひつよう}があります。現在は細かく切ったニシンなどを近くに撒いて他のイルカたちが食べる様子をユキに見てもらう時間を作っています。ユキも興味はあるようで、えさを口に入れては出すを繰り返すようになりました。また、最近では遊びの環境で氷を食べることを覚えました。氷を与える^{あた}と口の中で転がしてしばらく遊んだ後、飲み込みます。小さな氷と一緒に口の中にえさを入れると、飲み込むことも増えてきました。



これから先も、ユキが私たちにどんな驚きを与えるのかわくわくしながら成長を見守っていきます。皆さまもユキにぜひ会いに来てください。
(藤本彩香^{ふじもとあやか})



2階 かい しょうすいそう サンゴ礁水槽 (メガネモチノウオ)

南北600kmにもなる鹿児島県は有人島、無人島を合わせて1256もの島があります。これは全国で3番目の多さです。そんな鹿児島県の島々には全国から多くの釣り人が大物を求めてやってきます。今回紹介するメガネモチノウオも、トカラ列島で最大の島である中之島で釣り人によって釣り上げられ、かごしま水族館にやってきました。

メガネモチノウオは大型のべらのなかまで、最大で2mほどまで成長します。目の横に伸びる黒い線がメガネをかけているように見えることが名前の由来とされています。成長とともに頭部がコブのようにせり出してくるといふ特徴もあり、その形がナポレオンの被っていた帽子に似ていることから、別名「ナポレオンフィッシュ」と呼ばれます。



メガネをかけているように見える黒い線

かごしま水族館のメガネモチノウオの搬入時の大きさは全長90cm、体重12.7kgでした。最初は茶色っぽかった体色も、えさをたくさん食べて成長するにしたがって、青緑色に変化していきました。



搬入直後(左)と現在(右)の色の違い

すでにその大きさと体色から水槽内でもひときわ目を引く存在のメガネモチノウオ。これからかごしま水族館の人気者として皆さまに愛されることを願っています。(中村政之)

107. ミルのなかま



ミル

桜島の磯を歩くと、緑色をしたフェルトのような触り心地の海藻が打ち上がっているのが見つかります。最初は海藻だと分からないかもしれませんが。これはミルのなかまです。錦江湾にはミル、



錦江湾の なかまたち

ナガミル、クロミルなどミルのなかまがたくさん生育しています。体は小さな細胞(小囊)が集まってできていて、表面をなでると、ざらざら、つぶつぶしているのが分かります。桜島に多いクロミルは、つぶれた円柱形で叉状に枝分かれし、分かれる部分は平たく幅広になります。海藻は光合成を行うため、光のよく当たる浅い場所に生育することが多いですが、ミルのなかまは比較的深い場所にも生育しています。

日本では、現在食用にすることは少ないですが、昔はよく食べられていました。朝廷に献上されていたり、伊勢神宮では現在でも神事の際に使われていたりと古くから知られている海藻です。ミルは漢字で「海松」と表記され、万葉集に登場したり、ミルを広げた様子を象った「海松文」、「海松色」などが平安時代の着物に使われていたり古くから親しまれてきました。ミルを見かけたらその美しい形や色をぜひ観察してみてください。(新山美侑)



これはカニ？カニじゃない？？

めざ 目指せ！見分けマスター

皆さんはカニとヤドカリを一目で見分けることができますか。貝殻に入っていたらヤドカリ！入ってなかったらカニ！と答える方もいるかもしれませんが、実はヤドカリの中にはヤド（貝殻）を捨ててカニに似た姿に進化した種もあります。例えばタラバガニは名前にカニと付いていて、見た目もカニのように見えますが、実はヤドカリのなかまです（写真①）。またカニダマシという名前の通り、カニに似た姿をしたヤドカリのなかまもあります（写真②）。そんなカニに似たヤドカリを見て、本当にカニとヤドカリの見分けができるでしょうか。このアクアラボではカニとヤドカリ、カニに似たヤドカリの特徴をそれぞれの体のつくり（ちゆうもく）に注目しながら解説します。体のつくりはどこが同じでどこが違うのか、見分けるときにはどこに注目すればよいのかを確認し、最後にはクイズを出してカニなのかヤドカリなのかを



写真① タラバガニ



写真② イソカニダマシ

のかを実際に見分けていただきます。身近なようであまり知られていないカニとヤドカリの「見分け」マスターを目指してみませんか。（早友翔星）

とくべつ きかくてん 特別企画展

海の宝を釣り上げろ！～鹿児島県の釣魚展～

2025年7月18日(金)～11月3日(月・祝)



ポスター

鹿児島県は数多くの釣りスポットがあり、全国的にも釣り好きに人気の地域です。今回はそんな鹿児島県の海釣りを船・磯・砂浜・河口と海づり

公園の5つのコーナーに分け、その環境ごとに釣ることができる代表的な魚たちを紹介します。

魚釣りをするときには、対象の魚（生きもの）によって針や錘などの釣り道具のサイズや形を変えますが、今回は実物を展示しているので、いろいろな道具の違い、使い方がわかります。

今回の企画展では、九州発祥の「エギ（餌木）」というイカ釣り専用の道具も紹介しており、実際に「エギ」を作る体験イベントも開催しました。

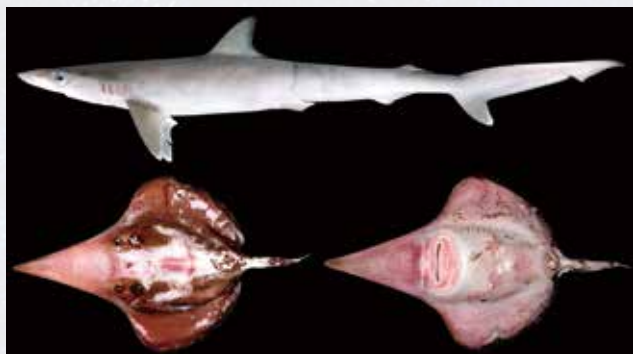
釣りを趣味にしている人から釣りをしたことのない人まで、楽しみながら釣りについて考えることのできる空間を目指して準備しました。ぜひ会場にお越しいただき、当館初の「釣り」をテーマにした特別企画展をご覧ください。（船川賢治）

かごしま水族館の調査によって報告された魚たち

水族館は調査・研究をする機関としての役割も担っているため、地域の自然史を記録することは水族館の存在意義であり、当館は多くの方々のご協力のもと鹿児島に生息する生きものの研究をしています。当館の調査で採集した魚や漁業者・地域の皆さまから寄贈していただいた魚の中には、とても珍しい種が含まれていることもあります。鹿児島から記録のない魚種の場合は、その種の情報の蓄積のためになるべく論文で報告して記録に残すようにしています。今回はここ5年間の当館の調査の中で、鹿児島大学総合研究博物館と共同で報告した魚たちを紹介します。

トガリメザメ *Loxodon macrorhinus*

2021年3月に奄美大島での展示用生物採集の際に当館職員によって釣り上げられました。和名の通り、眼の後縁が尖っていることが特徴です。日本では沖縄県からのみ記録されていた珍しい種で、鹿児島県から初めてかつ太平洋での分布北限記録となりました。



トガリメザメ (上) とムツエラエイ (左下: 背面、右下: 腹面)

ムツエラエイ *Hexatrygon bickelli*

2022年3月に指宿市の海岸に漂着していた個体を地元の方から寄贈していただきました。和名の通り、鰓あなが6対で、これはエイの仲間では本種だけがもつ特徴です。深海に生息する珍しい種で、九州からの初めての記録となりました。

シンカイスミツキヨウジ

Solegnathus (Solegnathus) lettiensis

2022年12月に上甕島の海岸に打ち上がっていた個体を地元の方から寄贈していただきました。分布北限記録となり、標準和名がなかったため、深い海に生息していることからシンカイスミツキヨウジと命名されました。



シンカイスミツキヨウジ

ナンヨウキホウボウ *Scalicus orientalis*

体験型連続講座「いおっ子海っ子体験塾」で深海生物を観察するため、2021年9月に薩摩半島南西

沖での深海底曳網漁の混獲物を漁業者から提供していただいたところ、その中から発見されました。日本では分布記録の少ない深海魚で、鹿児島県から初めての記録となりました。



ナンヨウキホウボウ

カガヤキミゾイサキ *Pomadasyss kaakan*

2021年12月に肝属郡肝付町で漁獲され、当館に生きたまま搬入されましたが、残念ながら5日後に死亡しました。日本では過去に2個体のみが記録されていて、本個体は国内3個体目の記録となりました。



カガヤキミゾイサキ (右: 搬入後のようす)

ワカタケスズメダイ *Chromis cinerascens*

2023年4月に南さつま市で当館職員によって採集されました。標本に基づく日本初記録となり、本種の体色が若い竹のような緑色(若竹色)であることに因みワカタケスズメダイと標準和名が付けられました。



ワカタケスズメダイ

バラムツ *Ruvettus pretiosus*

2020年6月に下甕島沖での深海底曳網漁で採集された個体を当館に提供していただきました。日本各地の深海域に分布していますが、人が消化できないワックスエステルを筋肉中にもち販売が禁止されているため分布記録は散発的で、九州周辺海域からの初めての記録となりました。



バラムツ

このように当館では漁業者や地域の皆さま、そして各地の研究者と連携して、鹿児島の生物多様性を明らかにするための研究活動も行っています。本誌のシリーズ「鹿児島 未知の魚を発見!」でご紹介しているように鹿児島の海からは次々と新種や日本初記録の魚が報告されています。いったい鹿児島では何種の魚がみられるのでしょうか。その疑問を解き明かすために今後も研究を続けていきます。皆さまも身近な水辺で思いがけない貴重な生きものとの出会いがあるかもしれません。これは!というような発見があった際はぜひ当館にご一報ください。

(中村潤平)

いおワールド 通信



赤ちゃんイルカの愛称が決まりました

2025年2月24日に生まれた赤ちゃんイルカの愛称が決定し、5月31日に愛称発表式が行われました。全応募数1008点の中から選ばれた愛称は「ユキ」！「鹿児島では珍しい“雪”の日に生まれた」「“幸”せになってほしい」との思いを込めて、ユキという愛称が選ばれました。ユキはどんどん大きく成長しています。当館のイベント「いるかの時間」ではお母さんイルカのマールといっしょにジャンプをするようになり、歳が近いレイやハッピーとともに泳ぐ姿もよく見かけます。ユキの成長に飼育員も日々刺激を受けています。

皆さまもユキの成長をどうぞ温かく見守ってください。（藤田彩乃）



ボランティア会議を開催しました

5月24日、桜島フェリーターミナル内の研修室にてボランティア会議を開催しました。会議の前に行った研修ではボランティアセンターの方をお招きし、基本的な心構えを教えていただいた後、車いすの使用法を実践形式で学びました。実際に車いすに乗ってみることで、スロープを上る大変さなどを体験する貴重な機会となりました。

会議では今年度活動を始めた27期の方の紹介、自主活動の報告、活動内での疑問点などが議題にあがりました。普段は個人で活動されているボランティアですが、今回総勢67名の方が一堂に会し意見交換できる有意義な会となりました。

会議後は水族館の2Fレストランにて懇親会が開かれました。参加した職員も1人ずつ自己紹介し、交流を楽しんでいました。（濱田穂華）



編集後記

今夏は、各地で記録的高温が観測されるなど、猛暑に悩まされた夏でした。また、自然災害の情報に不安を抱きながら過ごした夏でもありました。そのような中、ハンドウイルカのユキは毎日すくすくと成長しています。新しい発見に目を見張り、新しい遊びを覚えるユキ。好奇心のおもむくまま、挑戦し変化するユキを見ていると「毎日が新しい日」とあらためて気づかれます。さくらじまの海は今号で111号を迎えました。皆さまのアンケートのご意見をもとに、より多くの方に楽しんでもらえるように、ルビを増やしています。28年続いた「変わらない良さ」を大切にしつつも「変化」を追い求める、そんなさくらじまの海でありたいと考えています。（大塚美加）

シリーズ 鹿児島 未記の魚を発見!

No. 40 ダイオウカサゴ

約20年前から、鹿児島県内の岩礁域にはオニカサゴやオオウルマカサゴによく似た正体不明の大型魚が生息することが知られていました。その後、継続的な標本収集と形態学的・遺伝学的調査に基づいて、この種は2025年5月に新



ダイオウカサゴ *Scorpaenopsis gigas*

種ダイオウカサゴ *Scorpaenopsis gigas* として記載されました。本種はオニカサゴ属の中で最大級の種であり、体長30センチを超えます。この大きさに由来した標準和名や学名が命名されました。鹿児島県内では、甑島列島や鹿児島湾、大隅半島東岸などから記録されています。また、アングマン海からの記録もあり、本種は日本から東南アジアにかけて広く分布すると考えられます。

（鹿児島大学総合研究博物館 館長 本村浩之）

